



遠門
號 988
卷 4

落嚙 鮮草紙卷之四

神迎へ

十月いづものあな出雲のあな大社の諸のく神こ達ちあつまりの人
下ごのご後ごあらせらるら故ゆ社や内の神うづつまり。末ま社の
神か達のはなをひりし。外そへいでの雲うろろとしていれるを。
社し人にののこのこの小こかりひひ外そへいでの出いたまひひ神うづつまりひ。
御み神か達のをあらせらる。拙せ宅の入いりせ



下さるるぐい座のあつこのそしれ清くいさだしく
 して座のまき木い入つせ下さるるぐい素脊負
 ちまろぐいトソぞ それ奇持るじと随分仕
 小ならるるぐい汝裸なるるるぐい夜の上へおはせ純し
 烏帽子あしぬき控るるるぐい汝が正真の頭もやどり
 行なすトのあつ社人うとみて装束も烏帽子
 もぬが控赤裸なるるるるるるる社人へん流るるる社人
 の頭へひらまゝと糸うつつたまへ社人早くと定こ

立帰るるるるるる内室仰天とモシけ堂のま裸て
 あるるるるる社 女通ひるるる神をお供と
 あるるるるる社 神の正院宣は任せ
 のぐや社 神の正院宣は任せ
 せんがやるるるるるるの神ある社 出つそ
 こそとりまのいそんま下ある神さんやまのいそト謹
 社 モシあるるるるるるるるるるるるるるるるる
 賀豆神の今小澤も裸とさるるるるる

遠平の利口

雪ゆきよりけりし夜ようねありぬるふ雪ゆきの中なかに
ゆた大おほいなるものさつりある故ゆでつくあぐさ
とつけて男「それふあるへ行きじやト」遠「おれは遠とほく
たりや男」遠「えいば遠とほくや」遠「おれは遠とほく
作つくつて是これのいづや男」遠「遠とほく」遠「是これをこゝ
いつこい何なにをてゐるのや」遠「座ざ繰ずりを引ひいて
のいづ男」遠「座ざ繰ずりのや」遠「遠とほく」遠「いづこへ
いづこへ」

おれへこの座ざ繰ずりを引ひいて何なにもするにじや。おれを合あわ
らぬ先まにききいのお眼めをむいて。雪ゆきの中なかに志こころおれたつて
あるのいづ男。合あひ点てんがゆぬぞ。おまへさんのかゝる
の末すえいづ男ある。それゆ考くわがつらぬ。遠「おれは遠とほく」
と申まをす。そのうちおとけらるぞ

茶喰ちまひ

さむねとくる妓げ婦ふ。きりやうもさむね。頗おほ金かね
懸せるりるが。うつやとくる男おとこ。客きやくよりりてくる

は男強漢ふして。女くせ呑く。こらげても只記む
去るれども女を見つるも我をわさるるが故。うつや
とい号られける。その中ふ茶屋あそび例れ
さむねをよびて。うつやぬうて有るが極みの死
るれが。中あつう。冷く。例の樂しみを極る中
もふまうせざれが。玉子。野。う。は。お。あ。く。ま。で
く。く。も。う。う。ふ。き。め。し。し。を。ざ。り。は。れ。が。茶。や。の
樂。後。で。規。格。の。小。法。あ。て。麻。の。め。を。穿。せ。そ。を

志う。煙。よ。し。て。さ。ぶ。お。と。供。子。喰。ひ。ま。ひ。ま。身。中。を。ぬ
く。め。而。例。の。樂。を。極。め。ん。め。の。そ。と。さ。む。ね。を。喰。べ
と。り。が。和。や。ん。を。と。ひ。ひ。め。の。喰。こ。こ。へ。さ。る。う。め
さ。ア。それ。れ。れ。れ。ぬ。く。り。う。う。ち。つ。と。ど。も。喰。ひ。が。お
お。ま。け。お。祿。ま。ん。麻。が。出。て。あ。へ。も。さ。ま。ぬ。ず。こ。ハ。ト。展
う。つ。ア。そ。ん。な。事。で。中。ふ。た。つ。の。う。サ。ア。を。中。う。う。ら
一。等。だ。の。喰。ト。猪。そ。う。ふ。二。味。ほ。り。出。て。中。ら。ト
さ。か。ら。う。ら。う。一。等。た。ま。は。能。く。あ。ま。も。ん。お

まどいませと。麻をこぼさうぬ味そらぬしと喰
ばりぬぐんまのどや。それどもゆりトまひ
み喰まひ酒終らうや。さくらんうらうら新七
園中入がさむいもくまなりりト友達の勢
あ。いさむいさん。麻巻してちとあてまう
ま〜ころ。ハイニ株あてまうは〜

魚の前髪

年々の夜に豆飯またて。厄鬼をさくらまの
五田ノ田

中の書ふ出さるよ。産補部屋くの角迄
うち敷して宛の外くと打いさせけけはも厄
ま〜ひま〜あ〜と。透もく宛を遊ま〜ひて。
園(いさむい)さ〜る。麦食ふり〜る。皆ま〜や
〜と森入る。時合いよ〜と丁稚のま吉浦は
の穴よりぬけ出さ〜。ふん〜あ〜い〜し〜。猫が
嵐をうかが〜。ま〜る。枕をさ〜。かま
か〜やあ〜が。様(そら)〜と遠て終らん



五
四
ノ
五

たづねが蒲室の下。もたつて。下。あれ。え。たづねが
とびつくりする。孝小おもしろ。死。苦。頭。用。意。の。目。燭
て。つ。や。早。お。し。じ。い。ま。を。と。じ。い。れ。が。長。き。う。ろ。く
く。と。運。ぶ。る。を。苦。び。吐。つ。て。や。い。長。吉。め。何。で
今。時。合。小。女。の。の。傍。ま。ご。つ。く。め。や。何。て。お。よ
る。の。ぶ。や。一。豆。を。ひ。く。つ。よ。来。ま。し。の。の。ぶ。や

夏の相撲れ

近。死。こ。ろ。京。極。子。夏。と。い。ふ。の。ち。ろ。ろ。行。を。ま。し

分。が。其。礼。を。う。ろ。ろ。の。家。の。美。々。な。女。か。う。ろ。ろ。と。ま。ろ。
よ。ろ。ろ。の。瑞。相。を。あ。ら。わ。せ。ろ。ろ。人。を。迷。え。西。必。力
の。成。士。と。い。ふ。も。信。を。ま。し。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し
門。を。と。ご。う。ろ。ろ。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し
う。ろ。ろ。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し。大。人。何。の。こ。ま。ま。や。あれ
つ。ま。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し。思。う。事。を。う。ろ。ろ。の。う。ろ。ろ。ま。し
々。相。撲。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し。い。つ。て。夏。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し
看。板。を。出。し。て。い。は。す。の。れ。を。決。ま。ら。う。の。れ。ま。し。と。い。ふ。も。

傳 つた 式がたまふれを知らばや。徳人探ふまつく
ぬろくくしとまゐるぞ

鼠の神拜

鼠長屋控と清とより男。天は宮我まを。
菅家の屋茶子伏て。預言しるの。神上再お
くく。天神へ正座の。びや。かま。ま。と。ぬく。いま
集る。控。清。が。ん。根。を。碎。き。預。ひ。ま。の。明日は
社内。の。は。ぬ。る。り。大。部。と。中。ハ。三。百。五。十。七。

その大敵を素ふぬ。せぬるべ。さ。次。ま。び。の。百。五
の。うち。社。百。九。拾。九。女。之。考。二。米。を。用。神。子。指。げ。
社の。若。後。料。子。ま。り。づ。強。り。社。米。を。素。酒
あき。し。く。ん。つ。の。意。さ。う。う。
あ。そ。れ。酒。細。文。あ。ろ。を。更。飯。合。一。ら。い。く
と。ち。素。ふ。あ。ひ。く。び。絲。が。ひ。ら。る。ま。儀。子。素。酒。の。今
實。正。と。ま。る。る。人。う。ぬ。之。百。五。の。うち。九。拾。九。屋。神。子
指。げ。式。米。を。子。絲。を。強。え。ん。を。か。く。返。ら。ぬ。を

つくさつら。かやうの人まらそと。大爺へあそぶね。え
大子感んしてり。橙入魂の胃不肉豆源を
とめるを。赤の指の赤源へ衣のぞく我を忘れ
るまふ小形あり。故源を清そつと神をひ
源これ瓜橙何ぞといふ。トウも身も魚
むら。よみの故をきふ。武サ瓜橙とらして
のめがや。今腫が之百あのうち。武百九拾九あ
二あた武朱を神へあげて武朱のくみとりはぶ

いさふのめがや。あそぶ。うろこころ。コレサ橙。葉
コレサ橙。葉。ト。気候付せあつくね。女あそぶ
る。今天神さんを歌とめるのめがや

橙春の懐也

竹本葉飯。たま。と。る。浄。経。理。ま。名。も。た。り。の
る。の。も。と。も。赤。良。の。晒。回。屋。の。息。子。あ。り。け。は。な。ら。ぶ
あ。り。て。法。い。よ。も。ま。と。る。う。け。じ。き。の。胃。不。肉。豆。源。を
何。能。も。く。も。人。の。志。つ。を。看。ぬ。し。は。く。い。よ。こ。ふ

妙を得たり。其以浪蕪の南まで東妻より
梅を呑み入りて人々も真紅を前代未
だのこふしあれを見物群集するその評判
ををよほくし。兼版をま付し。此の丸めて
版はほくする。下素紅く見る。勿れ種を
看出ると。此をて。弟子一人をて。行方のみ。今
衣の蕪。此の。て。見物。つ。この。ま。
梅をい中して。て。ま。兼版も。梅。て。終て

見物を時梅香の男。う。ま。い。く。梅。今。の
うち曲者入り。故に我蕪をる。次を。あ。ま。て。
何れも一先。以。降り。と。と。と。断。り。故。見。物。大。は。な。
この。我。く。ま。を。方。我。事。り。し。う。ひ。も。さ。く。ま。ら。く。と。い。
梅。り。に。海。が。り。い。ま。ま。の。曲。者。を。う。り。故。版。く。て。果。く。
蕪。を。終。り。その。曲。者。は。何。れ。も。ふ。あ。り。ど。と。は。く。い。は。
梅。その。男。は。各。が。この。止。先。は。進。む。あ。る。こ。う。整。美。の。曲。
者。あり。と。兼。版。を。ま。を。持。て。故。ゆ。り。故。見。物。の。

件 州からこれを通り托をさんとして極座の座のりく
をや志侍ゆくと座補子通まがなまりの酒
肴殺し出仲張が古程を酒席の田舎客の口小合
ておのづから座も賑ふおろろ舟の業因子つま
て。とこれにが次の回には夫人の舎所のごとく富座なる
おまは職はくろり忍ひくろる女の人はがねも
座の九重さんへかう。ある極座の極座さん
これへかう。まごちまの救かり仕務く 件 四

どれでござりましとどが イヤく身共が買ふおま
二人もまじいの全行おまの望の男のおまどや
仲 男のおまどと作托おまの。 而座さんの巨や。
それゆりのお天神さんなるてや有る。と
而座をうつて。おまは。 イヤくどう有るも
遠よこのの 件 左様。おのぞみのおまさんの名
でもおまのいおいでみさりませぬ。 件 左様。く
ちがめうろろをさどよう。おまも聖のおま



中^{ちゆう}とて嬉^{うれ}しき^きの^のま^ま中^{ちゆう}ぬ^ぬが^がり^りら^らが^が「^いん^んが^が
田^い舎^{しゃ}さ^さが^がや^やと^とり^りて^ても^もあ^あん^んま^まり^りな^なじ^じや^や。あ^あ九^く彩^{さい}
巴^とち^ちま^まを^を愛^{あい}ま^まる^ると^とり^りて^てあ^ある^るめ^めう^う「^件あ^あり^り
あ^あん^んぞ^ぞか^から^らり^りま^まあ^あこ^この^ので^でご^ござ^ざり^りま^ませ^せ」

向^{むか}ち^ちま^まの^の忠^{ちゆう}心^{しん}義^ぎ

む^むさ^さの^の迹^{せき}水^{すい}を^を汲^くむ^むと^と救^{きう}命^{めい}法^{ぽう}を^をあ^あり^りま^まさ^さす^す
の^の道^{みち}実^{じつ}を^を梅^{ばい}王^{おう}丸^{まる}を^を石^{いし}道^{みち}に^にり^りて^てあ^あひ^ひむ^むさ^さの^の聖^{せい}命^{めい}
「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」
「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」

う^うけ^けあ^ある^るめ^めの^の六^{ろく}佐^さ田^{でん}の^の向^{むか}ち^ちま^まの^の身^み「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」
何^{なに}事^じ有^あり^りあ^ある^るや^や「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」
よ^より^りも^もさ^さく^く生^{せい}茂^{ぼう}り^り秀^{しゆ}源^{げん}と^とて^と落^{らく}ま^ま人^{にん}と^とい^いま^まさ^さく^く
あ^あつ^つ「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」
た^たま^まの^のぬ^ぬま^ま道^{みち}ま^まく^く秀^{しゆ}ふ^ふる^ると^とび^び倒^{たふ}れ^れた^たま^まの^の身^み
室^{むろ}と^とご^ご介^け「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」
法^{ぽう}の^の迹^{せき}を^を追^おひ^ひま^まり^りひ^ひと^と中^{ちゆう}上^{じやう}生^{せい}か^か世^せの^の間^ま
石^{いし}「^ところ^{ころ}ご^ござ^ざん^ん」
今^{いま}も^もさ^さく^くめ^めぬ^ぬ向^{むか}ち^ちま^まが^が忠^{ちゆう}心^{しん}義^ぎ及^及實^{じつ}は^はは^はと^と

つとに疾く及まるべしよと佐が下ると白きまを指

りけ二三丁ほどにしが佐の麻とおぼしけし座を

細で中め縫うるをて成部は港まのりしは紙の

ぞとあまを言ひはるはしるは集りてはるはる

を懸るをよめを懸るを懸るト一人ふきてはまがり

出まよへて道実を後あはせをて 目れ親又梅何と

りのどや浪介と源流どの半やアノ勿体なるわ

きき梅の半込大なるまでかろてあるしといとくも

舟もろひげぞ「海舟の」ト中うけの史及実と

割たまひ「葦」引やく白きまを左挽きたれしと

いさぶとあくはるがせよ「白」たりのぬまをひを

中りまをとのどや

出がらり

家のまを清らりを好むをたまをうて替るを

稍長じらるるに浮遊を拵て出がらり候なるのり

より男自燈まく「おとこトドまん」まの二重の小袖をまねる

浄瑠璃地住

冬の萩茅葉がゆをとたつて浄瑠璃の命を返す
 ひるふ連中身をふてほの茅葉を喰ひ
 てへ麻へあがり一膳づくかろりろる小糸助とろる田力
 赤い紀の十膳月をかろりろる 新替るきあわ
 のまじだらる妙光寺トとむむじみかろる柏子茅
 葉の姿持とごうろトとろるまぐしんねもす
 こぬるんそ 浄瑠璃は浄瑠璃の湯あはるまは浄瑠璃の湯

おのいすきつしそが浄瑠璃トかろり世は人 けん
 秘ごまの今のわんぐやん底でかろるのふお初純ま麻
 を鉄鉈まむる又白が有る浄瑠璃と嚙と相伝
 しそまてうろかろれんまろくひろとまろまろまろ
 男そかい 浄瑠璃まろまろまろまろまろまろまろ

つうてありのどや

街の夜神楽

昨夜中宵の夜のそりりさ大人は橋の南つら

よく盲人の杖をつたがう。花も雷もさうへんを
清きたりとうる。と大坂中ひたわらぬ如きま
と出してうらむある所。後神楽を舞ふる神
道者二人笛を被らむりして。ちんぷんぐんぐん。
いんぐちんぷんぐん。トを申して来ると盲人大い
いうり。いんぐちんぷんぐん。静ませぬ。おまがをさるを
つらてあるのふ。失物に方々志すぬふさうう。去
がうくを被るやあいと大へいの。何んや。

けいとうりうらむ。おまへかにけいとうりも去田殿うら
免許をうけて後形するものや。去田殿や。
うらむい。おまへあ申る後様さぬのさうや。
おまへとる名をいふてある。跡の字付や
おまへとる後様さるる。いんぐちんぷんぐん。
字付のめらうらむ。平体しうあ申れけい
いんぐちんぷんぐん。

後様神字紙四終

